

カルキ・プラーナにおける千年王国論的構造

渡 辺 たまき

一 千年王国論とインド

一・一 概念としての千年王国論

千年王国論（ミレナリアニズム）という言葉は、一九六〇年代初頭から歴史的な運動や思想、そして様々な社会に見られる宗教運動の分類概念として用いられてきたが、この概念は、多義的で曖昧なまま用いられてきた。ミレニアムという言葉の本来の意味に、その本質的意義を見出そうとするキリスト教史学者を中心とした歴史学者は、キリスト教の影響下にある運動のみを千年王国論と呼び、限定的にこの語を用いた。また、千年王国論を、キリスト教やユダヤ教以前のイランの宗教に歴史的起源をもったメシア信仰の伝播だとする見方もある。さらに、既存の体制に対する抑圧された民衆による革命的運動として、千年王国運動を扱う社会学者も少なくない。

一般的には歴史学者のノーマン・コーンによる千年王国論

の五つの特徴が、定義として定着しているようである。それによれば、千年王国論とは、(一) 共同体的である、(二) 現世的である、(三) まもなく来るといふ意味で緊迫的である、(四) 絶対的な変革をもたらず、(五) そうした変革は超自然的な力による、といった特徴を持つ。しかしこれは厳密な定義というよりは、実際に起こった事象の諸特徴を挙げたものであり、そのために曖昧さが残るが、そうした曖昧さの故に広い分野で用いられることが可能となった。こうした多義的な用法に対して、千年王国論という概念をあまりにも広範囲に適用した結果、一般化を招き、曖昧さと混乱を生じさせるため、「聖書の幻想的預言に直接かわる記述に限定すること」が、もつともよいと思われた」というブロックのような意見も見られるようになった。しかしながら千年王国論がいずれかの宗教、文化に本来的にあるかないかという問題よりも、本稿の問題関心にとつて重要と思われるのは、そうした概念を使って、異なった背景を持つと思われる宗教現象を関

係付け、比較分析することである。

一・二一 インドにおける千年王国論

これまでにさまざまな文化、各地の歴史にあらわれた運動が、千年王国論という用語のもとに考察されてきたが、インドにおける千年王国論はほとんど論じられていない。インドは、ユダヤ・キリスト教のメシア信仰の元となったイラン宗教の直接的な影響関係にあり、またキリスト教の布教も早くから行われてきた。さらに、世界の終末という主題と、はびこる悪を破る救済者という主題は、インドにおいて継続的に人々の関心となっていた。⁵⁾また植民地主義に対する抵抗運動も広くみられた。ところが、千年王国的運動はインドにはほとんど例外的にしか起こりえないといわれてきた。

そこで、まずインドにおける千年王国運動がいままで消極的にしか論じられてこなかった理由を明らかにする必要がある。インドにおいて千年王国運動が存在しないとされる理由は大きく分けて二つある。一つは社会人類学から出された意見で、インドの宗教には社会変革を導くような革命的運動が起こらなかつたというものである。もう一つは神学的立場から出されたもので、時間と歴史に関するインドとユダヤ・キリスト教間の思想的差異に関するものである。

第一の指摘についていえば、近現代の社会変化を主題とし

て扱っている分野からなされるもので、千年王国論の宗教学的意義を考える際には、必ずしも実際の社会変革は必要要素だとはいえない。さもなければ社会変革という具体的な結果をもたらさなかつた思想は意味のないものとなる。次に時間観念の差異からくる問題についていえば、先にあげたノーマン・コーン以来すでに、そうした点に関する千年王国論とインド宗教との非連続性は指摘されてきた。そしてそれを最も顕著にあらわしているのは宗教社会学者のブライアン・ウィルソンである。彼は千年王国論の多様性を認めながらも、神学的視点から、以下のように述べる。

例えば、輪廻の思想は直線の時間ではなく、静止または循環的な時間の観念である。救済が輪廻を通して到来する文化では、時の終わりに来たる集合的な救済としての千年王国の思想は全くなじみのないものである。千年王国は状況の突然のそして全体的な変化であるのに対し、輪廻は、個人的成果の着実な改善と、地位や幸福の着実な向上の経験を意味している。二つの神義論は、お互いに相容れない。また、これだけが基本的に両立しがたい知的な理論というわけではない。個人が無意識に前提としている伝統的な思考様式に与えられた傾向とも相容れない。それ故、インドでは非常に稀な例外を除いては、

千年王国の期待は広まりもしなかつたし、根つきもしなかつた。

ウィルソンによれば、千年王国論は、ユダヤ・キリスト教的な直線的な時間の観念から導き出されるものとされる。それは直接黙示文学によって影響された運動と、その運動（宣教活動など）によって波及していった第三世界での千年王国運動とを含む。いずれにせよ、歴史の延長線上に引き伸ばされた最初で最後の終末と救いという、キリスト教的文脈を始点とするのが、その立場といえる。その場合、議論はキリスト教史に限られてしまうが、しかしながらウィルソンは「キリスト教によって導かれた近代」という視点によって、キリスト教非近代の世界への広がりという観点から、議論のフィールドを拡大する。

ウィルソンはキリスト教における千年王国運動が直線的歴史観のもとにあることを前提としている。けれどもここで指摘したいのは、民衆宗教の要素が色濃い千年王国運動に、そのような教義的かつ観念的な「歴史意識」があつたとは考えにくいという点である。キリスト千年紀をめぐる一連の運動には、ウィルソンが想定しているような明確な歴史観が必ずしも見られないだけでなく、明らかに循環的な要素が多く見られる。西洋中世史家ジョルジュ・デュビイは、紀元千年紀

に書かれた歴史書のなかに、人間の歴史に周期的なりズムを見出す考えがあることを指摘している。また千年紀前後の混乱を経てのち、人々がそこに神との新たな約束を見出したことが記されている。つまり、千年王国運動の過程で、「神の国がまだ来ない」という意識も重要である一方、「神の国はもう来ている」という意識もまた、重要なのである。

一方ウィルソンの用いる資料が示しているように、彼の主張は近代キリスト教的視点からなされている。ユダヤ・キリスト教神学が、直線的歴史観を持つていたとしても、それを民衆的運動としてあらわれる千年王国論の必要条件とみなすことには問題がある。なぜなら、千年王国運動とは一般に、既存の教義や思想にとらわれず、新たな仕方であらわれてくる「絶対的な変革をもたらす」運動とされているからである（この場合の変革は必ずしも社会的変革ではなく、思想や存在様態の変革をも意味する）。故に千年王国運動はしばしば異端とされる。そもそもアウグスティヌス以降、中世において、聖書に示される神の国の到来は、心の中に実現するというのが正統であつた。ウィルソンの理解には、正統と異端、洗練された宗教思想と民衆の宗教意識とが同列に扱われているという問題があるが、これら担い手の違いはその運動や思想を論じる際には区別してみなす必要があるだろう。したがって、千年王国を論じる際に、教義的に示される

時間論の違いはそれほど大きな問題にならない。さらにいえば、「直線的」時間論、「循環的」時間論を、両文化の関係付けを否定する理由として扱う場合、各文化を比較する視野が閉ざされやすいという文化相対主義的な問題を⁽⁶⁾はらむ。

概念は汎用性の高いものに作り直すことができる。その意味で千年王国論は概念として粗いことは否めないが、そうした概念を用いて解釈することによって、関連性のないと思われるものに新しい意味を付与することができるようになる。本論文ではこうした立場から、カルキ化身を主として扱っているカルキ・プラーナを中心に、インドにおける終末観を千年王国論として位置付けることを試み、概念としての千年王国論を捉えなおす一助となることを目指している。そのため以下では千年王国論を宗教史の類型論の中に位置づけて解釈してみたい。

二 千年王国論の構造

二・一 千年王国の到来と楽園のイメージ

エリアアデの用語を借りて表現するなら、千年王国というイメージのアルケタイプは、神話的な始原(楽園)である。創世記でいえば、エデンの園として示されているような状態である。世界は、神によつて今まさに作られたのであり、そ

れゆえ、活力に満ちあふれ、生き生きとしている。世界全体が、未だ穢れを知らず、人間もまた、新しく造られたばかりであるがゆえに清らかである。神によつて造られたばかりということは、人と世界とが無条件に肯定されているということである。こうした始原の楽園は、アルカイックな社会においては、神話に表現されており、また祭で実現されている。千年王国論は、神話的始原をアルケタイプとしているが、千年王国の到来という出来事は、アルカイックな宗教においてそうであるような、単純な永遠回帰ではない。なぜなら、そうした宗教においては、祭のときに、人間が始原へと回帰することは、ある意味で当たり前のことであるのに対して、千年王国論では、そうした回帰がもはや不可能な状態を前提にしている。それゆえにこそ、千年王国やメシアが待望されているのである。

千年王国の到来とは、楽園から追放されてしまった人間に対して、いったんは閉ざされてしまった回帰の道が、再び開かれるという出来事である。先に、千年王国の実現は、単純な永遠回帰ではないといったのは、そうした意味においてである。

二・二 千年王国論の位置づけ

それでは、単純な永遠回帰ではないとしたら、千年王国論

的ヒエロファニーは、どのように性格付けることができるだろうか。

諸宗教を「発展段階」に応じて分類するという進化論的構図は、宗教をアニミズムから発生し、↓多神教→一神教（または二元論）へと発達するとしたエドワード・タイラー、「自然的宗教」と「倫理的宗教」とに分けたコルネリス・P・ティールなど、一九世紀以来展開している宗教史学発達の問題となってきた。「高等宗教」と「原始的宗教」というように宗教を価値的に区分することの問題などから、こうした図式への批判は二〇世紀前半から継続的になされているが、宗教と人類史の関係は、依然として宗教史学の問題の一つであるとされる。現在でも有力な宗教進化論の図式の一つがロバート・N・ペラーの分類で、宗教を象徴体系、行為、組織、社会的意義の四つの側面から分析し、「原始的」、「古代的」、「歴史的」、「近代的」、「現代的」とに分類した。ほかにも様々な発展図式は存在するが、ここでは、ジョセフ・キタガワによる歴史的類型論を用いて性格付けてみたい。キタガワの類型論は、先にあげた宗教発達論とは異なった問題意識、つまり人類の宗教体験の把握というところから発している。したがって、こうした図式化が個々の宗教を理解する場合に不十分であること、そしてこれが進化論の図式ではないことはキタガワ自身によって指摘されている。この試みは「全人類の歴史

的体験の中に現れた宗教体験と、その表現とを、全体的な立場から眺望し」「整理し、組織化」するためのものであるとする。

キタガワは、ヨアキム・ワッハが宗教史学の標準となるべき規範的宗教に対して用いた「クラシカル」という概念を歴史的類型として整理し、「プレクラシカル」、「クラシカル」、「ポストクラシカル」（「ノンクラシカル」とに分類した。それによると、「プレクラシカル」とは神話や祭祀を中心とした歴史化以前の宗教段階、しばしば「原始（プリミティブ）」もしくは「根源的（アルカイック）」とされてきた文化にみられる宗教的傾向性を示す。対して「クラシカル」とは、歴史時代に入って反省的思考、理論的体系の整備の進んだ文明において、神話よりも教義、哲学の方を重要視する宗教的傾向性を指し、ウェーバーやペラーが「世界宗教」、「歴史宗教」として示した宗教と重なる。「ポストクラシカル」な宗教とは現世中心的傾向と人間存在の意義の追求、精神の「自由」の追求を特徴とする現代にみられる宗教を指す。つまり「クラシカル」な宗教によって与えられていた「秩序」を否定するのが「ポストクラシカル」であるといえる。千年王国論が発生するのは近代以前であり、近代以降の千年王国論であっても、そこで主題化するのは神による救済であり、「ポストクラシカル」のような人間中心主義的な特徴があるとはいえ

ない。したがって本稿では第三の類型についての考察は特に
行わず、以下で「プレクラシカル」と「クラシカル」の二点
に絞って考察する。

クラシカル以前、つまりアルカイックな宗教では、神はコ
スモスに到来し、去ってゆくのを繰り返す。コスモスに神が
顕現するのは祭のときであり、それはコスモスが創られたと
きへの回帰である。それによつてこのコスモスは聖なるもの
となる。創世記的に表現すると、彼らはエデンの園への定期
的帰還が許されている人間、いかなれば、原罪以前の状態に
ちかといえる。もちろん、彼らといえども、始原への回帰
が可能になるのは、祭のときだけであり、常に樂園に暮らし
ているわけではないが、祭のときには、そこに聖なるものが
顕れるので、無条件に誰でも樂園にいることになる^(註)。

対して「クラシカル」な宗教では、聖なるものはこの世の
背後に働いているけれども、この世にはなく、そこには断絶
(原罪、マヤー)がある。人々は俗なるこの世から抜け出
て、聖なるあの世を目指す。それは、この世界が創られる以
前への回帰でもある。しかしながらそこでは、アルカイック
な人々が持っていたような聖なるものとの交流可能性はひど
く限られたものになる。たとえば創世記の場合、アダムの原
罪によつて、エデンの園から追放されてしまった人間には、
もはやそこへの回帰は許されていない。彼らに許されている

のは、エデンの東に住むことだけである。つまり、創世記に
おける神話的始原は、それについて知ることは許されている
が、アルカイックな神話の場合のように実際にそこへと回帰
することはできない場所あるいは時間として提示されている
のである。

さて、千年王国論の構造を、キタガワの二つのモデルから
図式化してみたい。千年王国論は、この世についての考え方
という点では、クラシカルなモデルに従っている。つまり、
現在の「この世界」は、それだけでは意味がない「俗なる世
界」として認識されているのである。現在の世界と人間は、
神話的始原と切り離されており、人間には、もはやそうした
回帰がまったく許されていないのだという認識がある。これ
は、ノーマン・コーンのいう千年王国論における切迫性に合
致する。

しかるに、千年王国論では、そうした「俗なる世界」の中
に、突如として「聖なるもの」が顕現し、それによつて、「俗
なる世界」が、そのまま「聖なる千年王国」に変貌する。こ
うした顕現は、クラシカル以前の、アルカイックなモデルと
同じ構造である。つまり、「この世界」の中において顕現が
あり、それによつて世界が聖化(コスモス化)されるという
構造である。この点は、コーンでは千年王国論における現世
性、集団性、社会変革性とされている。

以上のように、「プレクラシカル」と「クラシカル」というモデルを使って考えてみると、千年王国論とは、クラシカルな状況における、それ以前のようなアルカイックな仕方での聖なるものの顕現、という構造をもつたものと考えることが出来る。

三 カルキ・プラーナの千年王国論的構造

三・一 カルキ・プラーナの概要

プラーナとは、もともと「古い物語」という意味の聖典の一群であり、マハーバーラタ、ラーマヤナという二大叙事詩と並んで、ヒンドゥー教徒の信仰や慣習、人生観に強い影響力を持つている。叙事詩の要素をさらに発展させて成立したのがプラーナ聖典であるといわれるが、多種多様のプラーナがあり、最古のものは三世紀以前に成立したとされる。主なものは四世紀から十四世紀にかけて、ヴェーダの知識を持たない女性や低い身分の人々への教育を目的としてつくられた。物語はバラモンやヴェーダの伝承者とは別の、スータという弾唱詩人の集団によって語られる。のちにこうした物語は、寺廟や巡礼地に属する非バラモン階級の僧族たちの手によって語られていく中、様々な改変や挿入が行なわれた。プラーナが叙事詩に比べて極めて宗派的で、特定の神の賛美、

あるいは特定の巡礼地の徳などについての記述が多いのは、そうしたことによると言われる。

カルキ・プラーナは、副次的なプラーナとして位置づけられている⁽⁶⁾。ヴィシュヌ派に属するプラーナであり、未来に現れるヴィシュヌ神の第十の化身である英雄カルキについて述べられている。その成立は遅く、一四世紀には一つのプラーナとしてまとまったとされるが、そこに示される主題は、それ以前の諸プラーナに既に示されている内容を詳細にしたものである。それによれば、宇宙の第四期であるカリ・ユガ（暗黒時代）には、思慮のない人々が増え、カースト制度は混乱し、あらゆる徳も、規範も、学問も失われる。人々は欲望と虚偽に満ち、神々の名前も忘れさられた。そこで、神々に救いを請われたヴィシュヌは、帰依者の家にカルキとして生まれ、仏教徒や蛮族、最終的にはカリ・ユガの人格化であるカリ王の軍勢と戦って勝利をおさめ、世界に秩序と正義を確立した。そしてそれによって、サッティヤ・ユガ（真理の時代）という新しい時代が始まる。その後カルキは故郷シャンバラへ戻り、そこで千年間平和を築んだとされる。

三・二 カルキ・プラーナの歴史的状況

一般に、『マハーバーラタ』や『ラーマヤナ』、そしてプラーナのような叙事詩的な神話が出てきて、バラモン教が

ヒンドウ教になるのは、仏教やジャイナ教などの非バラモンの宗教の勃興に対抗するため、バラモン教が土着の信仰を受容していった結果だとされる。

しかしそうした外的要因だけでなく、ヴェーダからブラーフmana、ウパニシャッドへと至るバラモン教の流れ自体にも、こういったプラーナを生み出す必然性があったとみなすべきである。

ヴェーダの時代には、暴風神ルドラや天空神インドラをはじめとして、世界の諸現象として神々が顕れ、そこに重要性があった。つまり、先にあげたモデルにあてはめていえば、どちらかといえばアルカイックな宗教であったといえる。その後、ブラーフmana文献におけるように、祭祀により神々の背後に働く天淵（リタ）を知るようになり、人々にとつての重要性が、神々ではなく、神々ですらそれには逆らえない原則そのものへと移っていった。祭祀主義とは、こうした原則を知ることができれば、神も人も宇宙も自在に動かすことができるというものである。ウパニシャッドは、そうしたブラーフmanaの形式主義に反対して、祭祀を行うものの内面の充実、即ち内的供犠に重要性をみいだす。しかしそれは、宇宙の原理たるブラフマンを個人的自覚において知ることであり、彼らの関心はもっぱら宇宙の外に向けられることとなっていた。仏教はその意味でウパニシャッドの延長線上にあ

るといえる。

以上のような歴史の変遷は、おおまかにいえば、先にあげたアルカイックな宗教から、クラシカルな宗教への変遷として把握することができる。こうした流れが、インド宗教史の主流であったということについては、異論がないであろう。しかしながら、こうした流れがある一方で、たとえばバラモン教がヒンドウ教へ変化していくことに端的にしめされているような、もう一つのシンクレティックな流れがある。確かに、プラーナは教導の書として編集されていたが、このことは単にヴェーダの知識が一方的に民衆に広められたということではない。「最高の認識」を民衆にわかるように伝えるということも、同様に民衆の宗教意識をそこに吸い込むということでもある。それは民衆の側からの、特権化された知識の再解釈である。カルキ・プラーナは、この流れの中に位置づけられる宗教現象であるが、こうした流れは、主流（宗教のクラシカル化）に対するゆりもどしであると考えられる。ゆりもどしの流れにおいて目指されていることは、クラシカル化によって忘れさられた宗教的価値の再発見・再評価である。

三、三 カルキ・プラーナの千年王国論的構造

先に、千年王国論はその構造上、クラシカルな類型とプレ

クラシカルな類型の両方の特徴を備えていると述べたが、敷衍すれば以下の二点である。

(一) この世界が、俗なる世界（聖化されていない世界）だという認識（クラシカルな側面）

(二) この世界においてヒエロフアニーがあり、それによって、この俗なる世界が聖化され、コスモスへと変容する。（プレクラシカルな側面）

カルキ・プラーナの場合でいえば、(一) 現在がカリ・ユガであると述べられており、(二) ヴィシユヌが地上へと転生し、カルキとして人格化したカリ・ユガ（カリ王）を打ち倒す、ということになる。

まず、(一) のカリ・ユガについてだが、カルキ・プラーナでは、ヴィシユヌがカルキとして地上に転生することとなる直接の原因は、神々がヴィシユヌに頼んだからであると考えられている。なぜ神々がヴィシユヌに助けを求めたかという点、人間が神々の名前を忘れて祭祀をしなくなり、神々への供物が届かなくなったからである。カルキ・プラーナにおけるカリ・ユガは、まず第一に、地上に暮らす人間によってではなく、人間からの供物が届かずに困っている神々によって問題とされているのである。⁽¹⁸⁾

カリ・ユガに対するこうした理解は、クラシカル化の過程で教義化され、洗練されていったユガ説⁽¹⁹⁾に対する、アルカ

イックな宗教の視点からの再解釈といえる。すなわち神々の名前が忘れられ、祭祀が行われなくなるといことは、クラシカル化の過程において、この世界（現象世界）⁽²⁰⁾ が脱聖化されていくプロセスと重なっているからである。

神々、特にこの世界に顕現する神々の重要性は、クラシカル化のプロセスにおいて減少していった。すなわち、神々の名前は、実際に、「忘れ去られて」いったのである。また、祭祀の価値や、神々に供物を捧げることの意味も、重要視されなくなっていた。ウパニシャッドでは、神々に実際に供物を捧げることは「外的供儀」であると考えられ、それは内的供儀よりも劣ったものだと考えられるようになった。神々の名前が忘れられ、供物が届かなくなるという表現は、内的供儀のもたらす帰結を、具体的に示すものとみなしうる。

カルキ・プラーナにおけるカリ・ユガの描写は、「この世界が聖なるコスモスではない」という認識を示しており、その点でクラシカルな類型における視点をとっているといえる。しかしながら、そうした認識にもとづきつつ、神々が考えた解決策は、ヴィシユヌに頼んで世界を再コスモス化してもらおうというものであった。こうした発想は、明らかにプレクラシカルな類型におけるものである。

次に、(二) ヴィシユヌの顕現について考察する。供物が届かなくなつて困った神々は、ヴィシユヌの領域（ヴァイク

ンタ)へ行つて、ヴィシユヌに助けを求めた。ヴィシユヌは、救世主として地上に転生し、神的な秩序を取り戻すことを約束したのだが、なぜ自分がカルキとして地上に転生しなければならぬかを説明して、次のように述べている。

地上から遠く離れたこの乳海からは、物事がうまく指示できないかもしれない。だから我々は、悪漢を倒し、その後に法と秩序と正しさをもたらすため、地上に赴かなければならない。これは地上に救いをもたらし、神的な秩序を立て直す、唯一確実で、時間が証明したやり方なのだ。⁽²⁾

ここでヴィシユヌ自身が述べているように、彼の領域は「地上から遠く離れた乳海」にあつた。ちなみに神々は、ヴィシユヌに頼む前にブラフマンのところへ行つて断られたのだが、ブラフマンの領域もヴィシユヌの領域も、ともにカリ・ユガの影響を受けてはいなかった。彼ら根本的な神々は、供物が届かなくて困っている神々とは違い、「地上から遠く離れた」彼らの世界において、その世界はカリ・ユガとは関係ない。

ブラフマンやヴィシユヌの「遠さ」とは、彼らがクラシカルな類型における、根本的・本質的な神であることを表現し

ていると考えられるが、同時に、現在のこの世界内に顕現しない神であるということ、つまりアルカイックなタイプの考へ方における、ディオス・オティオススであることをも象徴していると思われる。中性的原理であるブラフマンは、前者の要素が強く、それに対してヴィシユヌは、後者の要素が強いといえるだろう。リグ・ヴェーダなどの神話時代の神話と、カルキ・プラーナのような後世の神話の違いは、神がその顕現を限定していることにある。人々がおおらかに神の名を讃えて神々の行いを語るのではなく、神々はそう頻繁に現れることなくつた時代の神話なのである。だからこそ、その顕現は奇跡的であり、固定化された世界を徹底的に変革する力を持つ。

ブラフマンの領域には、「聖者たち」がいると述べられているが、彼らはおそらく、地上世界(マヤーの世界)からブラフマンの世界(真実在の世界)へと解脱した人々たちである⁽³⁾。彼らはもはや地上世界とは関わらず、そこで起こる問題を解決する力ももたない。またブラフマン自身、自分は救い主を与えるのに適しておらず、ヴィシユヌだけが、救い主を与えてくれると述べており、地上世界を聖化する力も、聖化しようとする意欲も見いだせない。

これに対してヴィシユヌは、自分がカルキとして転生(顕現)することこそが、地上に神的な秩序を立て直すための、

唯一確実な方法であると断言している。すなわちヴィシユヌは、クラシカルなタイプ（解脱など）の宗教の方法では、地上世界を聖化する（コスモス化する）ことはできず、ただ地上への神の顕現だけが、世界をそれ自体として聖化することができるのだと宣言しているのである。

かくして、ヴィシユヌはカルキとして地上に顕現し、カリの軍勢を打ち倒して地上に再び秩序をうち建てた。この世界が聖化され、コスモスに変容するのは、直接的には、カルキがカリ・ユガそのものであるカリの軍勢を打ち倒したからだと語られているが、根本的には、ヴィシユヌがカルキとしてこの世界に顕現したという事実それ自体が、世界を聖化するのである。

四 結

何かを発見することとは、ある側面を明晰に認識することであるから、結果として別の側面を見失うということでもある。それゆえ、聖なるものの全体性という点からいうと、発見することと見失うことは同義である。人類の宗教史では、発見し、見失い、再び発見するという営みが、弁証法的に相互に関係しあいながら、連続してなされてきたといえる。

クラシカルな宗教の方向性は、一般的にいつて、抽象化・普遍化へと向かっていく。インドの場合では、プラーマナ書によつて、顕現する神々（リグの神々）が否定され、次にウパニシャッドによつて祭式が否定され、ブッダ以後には、すべての現象するものが「マヤー」として否定されるまでになった。こうした否定は、ひとえに、すべての現象の背後にある、普遍的な聖なるものを探求していったがゆえである。

しかしながら、聖なるものを、その普遍性においてのみ把握しようとすることは、聖なるものの顕現という出来事の中にあるもう一つの重要な側面、すなわち、その創造的側面、つまり、具体的な何かが創造されることの意味を見失うことでもある。「本質」こそが重要だと思えばこそ、現れたものは単なる「現象」にすぎないとみなされる。しかしながら、創造的側面に焦点をあててみれば、何もなかったところに何かが「創造された」ことこそが神聖なのであって、この場合、「普遍的なもの」は、単に、「未だ創造されざるもの」、潜勢態、カオスにすぎないということになるだろう。

カルキ・プラーナにおける千年王国論的解釈というのは、クラシカルなタイプ（クラシカル）の宗教経験とクラシカル以前のアルカイックなタイプ（アルカイック）の宗教経験を統合しようとする試みとして意義づけることができる。それは、顕現の重要性という方向性

と、聖なるものの普遍性・絶対性という方向性を統合するものである。宗教史というのはいさした統合の連続、古い宗教のあいだにある再解釈の一つの形として千年王国運動をモデルにし、そのような再解釈の営みとして、カルキ・プラナーを意義づけてみた。

[注]

- (1) 鈴木中正は、ともすればユダヤ・キリスト教世界にのみ見られる固有の事象であるかのように解されてきた千年王国論を、歴史的伝播に注目することによってこの信仰および運動の通世界性、通人類性を強調した。
- (2) ノーマン・コーン 『千年王国の追求』 p.4
- (3) 田村秀夫 『イギリス革命と千年王国』 p.9
- (4) Block, R. Visionary Republic: Millennial themes in American Thoughts. p.xvi
- (5) インドで広く知られている諸プラナーの古典的な主題としては、宇宙の創造、破壊及び再建、神々及び聖仙の系譜、人祖マヌに支配される莫大な期間、王の系譜の五種であるが、最後の王の系譜は、末法の世(カリ・ユガ)の予言のかたちを取る。カルキ化身は他のプラナーにおいても、そうした末法の救済者として言及される。他にも終末、末法といった状況は、物語などのなかで多く用いられる。
- (6) 例えばピーター・ワースレイ『千年王国と未開社会』、E. J. ホプズボーム『素朴な反逆者たち』
- (7) ブライアン・ウィルソン『千年王国のヴィジエン』 p.320

- (8) デュビイ『紀元年千年』 p.2930, 161-162
- (9) エリアーデは「時間の撥無の方法」という問題からこうした二項を立てており、前者は後者の一種のヴァリアントとされている。
- (10) 島園進『宗教史の可能性(序論)』 pp.6-12
- (11) Robert N. Bellah, "Religious Evolution": Beyond Belief
- (12) ジョセフ・M・キタガワ『未開宗教・古典的宗教』ならびに近代世界との諸宗教」、北川三夫『現代世界と宗教学』。引用部は「現代宗教学」 pp.70-71
- (13) クラシカルな宗教について、キタガワは次の三点の特徴を指摘している。すなわち、1・ミユトスからのロゴスの解放。2. この現象界や人生に対する否定的態度の展開。3. 宗教の理論的・実践的・社会的各側面の洗練、体系化である。キタガワは「未開宗教」「世界宗教」「現代宗教」という分類を、あえて「クラシカル」とそれ以前以後という言い方で統合することで、宗教の歴史的類型を図式的に整理した。
- (14) 「超自然的存在に関する神話的解釈に追従かつ模倣しながら、原始人や未開人は、混沌から宇宙的調和を創造する原初的行為を再現し、かつそれに参与するわけであるが、この行為は、秩序のみならず、人間的規範や様式を確立したり維持したりするという意味を暗にふくんでいる。」キタガワ前掲書 p.50
- (15) 中村元『ヒンドゥー教史』。しかしヴィンテルニッツは「プラナー」の概念をさらに拡大させ、聖典としてまとめられる以前の物語り群も「プラナー」であるとし、その意味で叙事詩は「プラナー」をまとめて出来上がったものであるとしている(ヴィンテルニッツ「叙事詩とプラナー」)。
- (16) 主たるプラナー(マハープラナー)はブラフマ、バドマ、ヴィシュヌ、ヴァーユ、バーガヴァタ、ナラダ、マールカンデーヤ、アグニ、バヴィシユヤ、ブラフマヴァイヴァルタ、リンガ、ヴァーラーハ、スカンダ、ヴァーマナ、カウルマ、マツヤ、ガルダ、

ブラフマーンダの18種である。カルキ・プラーナはこのうち最も有名な「バーガヴァタ・プラーナ」の続編とされている(Hazra, *Studies in the Upanishads*)。

(17) 例えばクシテイ・モーン・セーンは、仏教以降のバラモン教はその方法を真似て、寓話を布教に用いるようになったとしている(「ヒンドゥー教」)。

(18) もちろん、「このような世界の大混乱のなか、人々は神の力に救済を求めた」と書かれているように、カリ・ユガは、人間にとっても重大な問題であった。

(19) 世界の生成から崩壊までを四時期に分けるユガ説は、プラーナの時代に先立つクシヤーナ朝の時代の碑文にすでに見られている(中村前掲書 p.171)。

(20) こうした世界の脱聖化のプロセスについて、エリアーデは次のように述べている。プラーフマナ文献において、ヴェーダの神々は、ブラジャーパティが優位になるにつれて、その価値は根本的に失われた。ウパニシャッドの作者たちは、このプロセスを受け継ぎ、さらに推し進めていく。だが、彼らはそれより先まで進み、万能のはずの供犠の価値を貶めることさえ躊躇しなかったのである。一部のウパニシャッドのテクストは、アートマンについての願望なしには、供犠は不完全であると記している。チャーンドーギヤ・ウパニシャッドは、「行為(カルマ)によって得られた世界はすべて滅びる」ように、供犠によって得られた世界もやはり滅びると述べている。マイトリ・ウパニシャッドによれば、供犠の重要さに幻想を抱くものは憐憫に値する。なぜなら、たとえ良い働きによって天上で顕著な地位を占め、それを享受したにせよ、やがては地上に戻るか異界に下ることになるからである。真のリシにとつては、神々も儀礼も重要ではない。その理想は、最古のウパニシャッドであるプリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドに伝えられる祈りのなかに鬼事に表明されている。「無

から我を有へと導け、闇から光へと我を導け、死から不死へと我を導け!」。「世界宗教史I」、p.271

(21) Kalki Purana I.2.

(22) 「ブラフマーンの領域は理想的な状態で、聖者たちは聖典を唱え、祭式の煙は薫り高く、彼ら(訪ねていった神々)に行く先(ブラフマンのいるところ)を示してゐた。」Kalki Purana I.1

【参考資料】

- Kalki Purana. Nag Publishers. 1986.
Kalki Purana. trans. B. K. Chaturvedi. Diamond Pocket Books. 2006.
Prose English Translation of Vishnupuranam. trans. Mannatha Nah Dutt Chowkhamba sanskrit series office. 1972.
The Early Upanishads. revised. Patric Olivelle. Patrick Olivelle Oxford U.P. 1998.
Beyond Belief. Bellah, Robert N. Harper & Row Publishers. 1970.
Studies in the Upanishads vol. I. Hazra, R.C. Sanskrit College. 1958.
Visionary Republic: Millennial themes in American Thoughts 1756-1800. Book Ruth H. Cambridge University Press. 1985.
ブライアン・ウィルソン「千年王国のヴィジョン」長谷川伸子訳「思想」62号一九七六
ヴィンテルニッツ「叙事詩とプラーナ」インド文献史第二巻中野義照訳 日本インド学界 一九六五〔原著一九〇七〕
ミルチェ・エリアーデ「世界宗教史I」筑摩書房一九一一〔原著一九七六〕
ジョセフ・M・キタガワ「未開宗教、古典的宗教、ならびに近代世界の諸宗教」『現代の宗教学』東京大学出版一九七〇〔原著一九六七〕
北川三夫「現代世界と宗教学」僧教出版社一九八五

- ノーマン・コーン『千年王国の追求』江川徹訳 紀伊國屋書店一九七八
 『原著一九五七』
- 齋藤昭俊『インドの神々』吉川弘文館一九八六
 島蘭進『宗教史の可能性』岩波講座宗教3『宗教史の可能性』
 岩波書店 二〇〇四
- 鈴木中正編著『千年王国的民衆運動の研究』東京大学出版会一九八一
 田村秀夫編著『イギリス革命と千年王国』同文館出版一九九〇
 ジョルジュ・デュビイ『紀元千年』若杉泰子訳 公論社一九七五〔原著
 一九六七〕
- 中村 元『ヒンドゥー教史』世界宗教史叢書6 山川出版一九七九
 E. J. ホブズボーム『素朴な反逆者たち』水田洋他訳 社会思想社
 一九八九〔原著一九五〇〕
- ピーター・ワースレイ『千年王国と未開社会』紀伊國屋書店一九八一〔原
 著一九五七〕

(わたなべ・たまき 筑波大学大学院博士課程)

人文社会科学研究所 哲学・思想専攻)